

# 一八 大正三年史

## (一) 寒 稽 古

朝風面を刮り、五寒指を墜さんばかりの早曉三十日間に亘り、午前五時と六時の嚴格なる點呼の下に行はれた寒稽古は、二月十一日紀元節の祝日に目出度く終りたれば、同日午前七時半より、道場に於て稽古後終了會を開き、皆勤者及び精勤者に對する證書授與式を擧げ、後一同祝の汁粉に舌鼓を打つた。皆勤の健兒は左の百十一名にして、多數の先輩も加はり、盛なる寒稽古であつた。

### 幼年組（二十六名）

城田九萬雄、相澤一、森永義忠、篠田富士男、中西萬世、茂木芳次郎、廣瀬喜太郎、高鹿正夫、田中清之助、西元雄、飯泉甚兵衛、川崎八郎次、藤山愛一郎、秋山信好、富尾守、城田二郎、小田切猛太郎、福島恭之助、宮田位次郎、國島光吉、峰浪雄、鈴木忠輔、稻田勇、池田政銀、富澤敬次、清水弘文。

### 成年組（六十九名）

自念竹藏、藤倉茂助、太田繁造、松永茂徳、葉山健二郎、田島光吉、西澤武一郎、竹本類治、鹽見清九郎、緒方彌一郎、益源藏、酒井英一、石室貞治、前田誠一郎、岩崎鍊、中村安茂、高橋長治、山本常茂、田巻倉之助、横山四郎、松平正夫、今英吉、富澤明治郎、岩垂梅四郎、岩垂邦雄、金子正司、森田圓二、稻葉欽一、大野政顯、高桑達雄、横井一郎、垂水雄一、清水兵吉、福田與志三郎、伊澤雄二郎、菅原剛寛、大倉秀之進、土谷梅吉、安増潤一郎、八城伍七、工藤謙、

小花次郎、廣瀬海人、川北吉次郎、後藤辰治、岩垂捨三、野田市太郎、平木六郎、瀬川純三、後倉徳太郎、塚田修一、日東寺政男、鈴木元吉、田中健吉、藤原惣次郎、小山内信、岸田寅之助、須川雅、高橋弘、神谷嘉一、田野元次、石塚彌之助、北村孝次、吉年研三、橋口良吉、岡善次、神崎清一、東野衛、森久則。

有段者（十名）

高梨尊雄、坂東舜一、和田義雄、幸田義、岩崎清一郎、桑原政憲、尾上繁二、下川健太郎、柳澤徳治、島泰次郎。

先輩其他（六名）

香下玄人、竹内平吉、盛田保三、湯本芳三郎、中村愛作、飯塚師範。

## （二）卒業生紅白勝負

二月十五日

（紅）

（白）

高 橋  
山 田  
井 仁  
木 長 谷 川

（大外刈）  
（背負）

（腰投） 五  
（大外刈） 山

島 口 田 益

原 岩 田 卷（押込）

（押込） 松 福 伊 永 藤 仁 木 長 谷 川  
自 山 田 念 口

（合外返） 高 森 松

桑 田 平 岩 口 田 益

西 横 岩 崎 村（大外刈） 山



(腕挫) 飯塚子(内股)  
 (内股) 大將山本○  
 (腕逆) 塚塚大將本○

右勝負終了後、午後六時より高輪萬清に於て送別會を備し、會する者約五十名、盛なる會であつた。

尙當日、本年度寒稽古を皆勤したる有段者八名に、先輩より木盃の寄贈あり、又柔道部より先輩、中村、湯本、盛田の三兄に對し、多年我が部に盡力せられたる好意に報ゆる爲め、木盃を贈呈した。

### 本年度卒業生

(三段) 澤山福彌太、山本忍己、塚本福治郎、金子忠之助

(二段) 柳澤徳治、原清

(初段) 三浦種良、稻葉茂、山本忠清、白方梅吉(商工部)、高橋篤、橋本廉平、後藤豊吉、高梨尊雄(普通部)

(一級) 斎藤義臣、本間保次郎、後藤幹夫

(二級) 後藤孝、谷口秀佐、高橋弘

### (三) 新入部員歓迎紅白勝負

大正三年度新入部員の爲に、五月十日午前九時より歓迎大會を開いた。前日までの曇天に引換へ、此の日は天に一點の雲もなく、新緑を通して吹き来る初夏の風爽やかにして、力戦奮闘には絶好の日和であつた。

(返技) (押込) (紅)

(白)

江 田 松 岡 森 伊 近 濱 魁 甘 高 吉 小 安 直 木 栗

(押込)

(直)

(木)

(栗)

副 卷 永 田 田 藤 野 井 利 地 国 泉 鈴 濱 田 高 上

(押込)

(田)

(高)

(上)

今 染 今 潮 高 志 小 中 木 鈴 濱 高 上

(返技)

(小)

(中)

(木)

(鈴)

(濱)

(高)

(上)

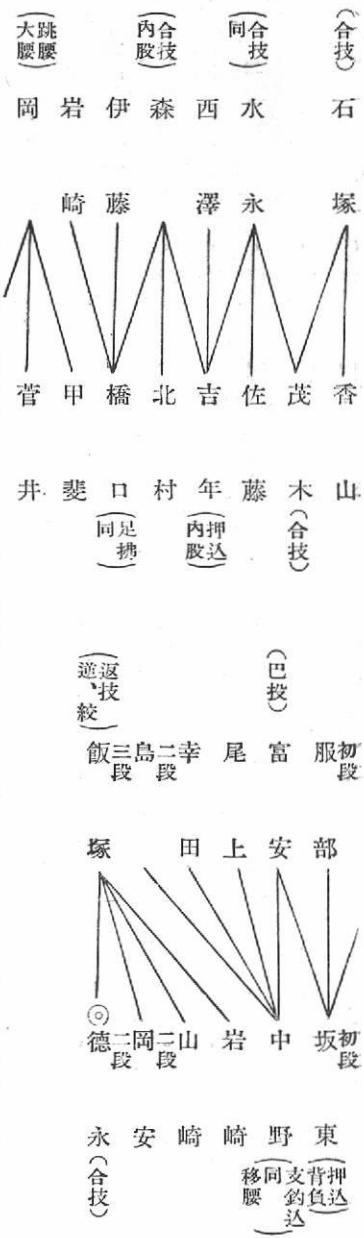
(足拂) (大技外)

副 卷 永 田 田 藤 野 井 利 地 国 泉 鈴 濱 田 高 上

(足拂)

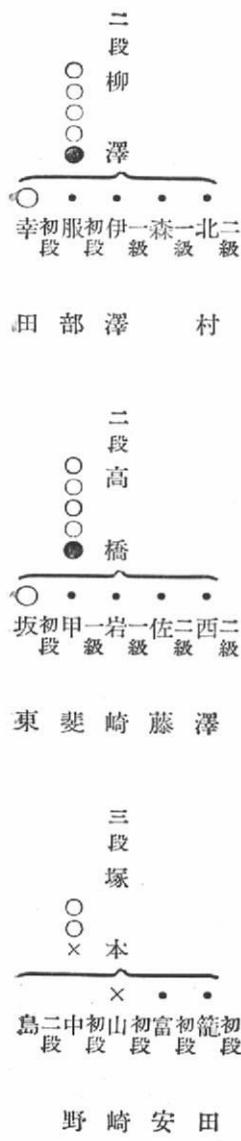
(大技外)

(足拂)



勝負開始の宣告に依り、紅軍の先陣直木砲火を切れば、栗原之に應へて出でしが敗退す。白軍の勇士小山次に出でて敵三騎を撃ち、四騎目と引分け、白軍の爲に氣を上ぐ。潮田、高桑、菅原、瀧川出でゝ日頃の手練を示せば、紅軍に江副、伊藤、廣瀬の剛の者、よく味方の悲運を回復し、戦ひ時と共に益々佳境に入りしが、腹も身の内とて塚田、渡倉にて一先づ和を講じ、午後一時再び兵は交へられたり。吉年の奮闘、森、橋口の善戦、共に兩軍の感嘆する所、然も紅軍の段外大將岡兵曹長哨兵線に馬を進むる時、白軍には甲斐、菅井の準士官手を共にして名乗を上ぐ。兵曹長これを打見て怒髪天を衝き、エイの掛聲未だ消へざるに、右の跳腰甲斐の體を粉碎し、審判者に一本の聲あり、菅井如何で之を見て黙すべき、塾で三年佐原で五年、練りに練りたる得意の體落、己れ觀念せよと續けざまに連發すれば、岡の頑猛益々加はり、頭よりは百尺の湯氣を立て、口中よりは八戒の火を吹き、目を釣上げ、歯を食ひしめ、その物凄きこと言ふべくもなし。發止と打出す右の大外、終に菅井の首を落したり。清さんこの晩の夢や如何。時に『無段者は有段者に對して逆を許す』の宣言あり。初段坂東君の出陣、岡の得意の顔、岡ちやめを言囁す聲は暫し場内に充ち満ちたりしが、坂東流石は有段者、譬へ

ば壯者が赤子を取扱ふごと、岡の打出す右跳腰も、右の大外も體を流して物にせず、岡無念の歯をかみしめしが、坂東のビタリと抑へし逆十字、四十秒の後には、次なる服部初段も背負投に返り打ちになつて居た。富安君の得意の巴極りて坂東君退き、富安は中野君の爲に倒る。尾上、幸田續いて中野に破れ、二段島君善戦すれども終に引分けとなる。中野君の進境正に三段の價値あり。岩崎初段日頃の願達せられて、最大甘手飯塚御大と戈を交え、其結果は負けたりと雖も飯塚三段をひよろつかせし功、當日紅軍の勝の基をなせしものと謂ふべし。山崎君の健闘、岡安君の老練は、共に兩軍の勇士に片唾を呑ましめぬ。白軍の大將鶴淵三段缺席せし爲め、徳永二段最後を受けて立ち、兩軍はこれによりて勝負を決せんとする。兩將の心事如何あるべき。飯塚三段永き戦争に耐へて尙ほ意氣上り、徳永二段勝負運を信じて動せず。彼引けば此れつけ入り、彼押せば此れ引く。一上一下互に兎毛の隙もなし。かくてあるべきにあらずと、徳永は左の巻込の巨砲を發すれば、飯塚三段の體は破れしかと見えしが、流石は御大なり、身を外しての受身巨砲功なし。然るにその時飯塚三段の顔色變りぬ。彼は前日來の稽古にて左の足に軽からざる負傷をなし居りしに、勝負好きな彼はこれを秘して出場せるなり。今受けし受身が痛手となりて、右の膝の關節を傷けしなり。されど今は責任上如何で止むべきて、再びこれに手當をして戦を續くる三十五分。徳永の最後の大外合せ業となりて、當日の勝は紅組のものとなりたり。これにて紅白勝負を了り、新先輩連の五人掛となれり。その結果は次の如し。



勝負後晩餐會を開き、飯塚幹事の歡迎の辭、幼年組新入部員渡邊君の答辭等あり、部員一同十二分の歓を盡し、午後十時閉會せしが、會する者百六十餘名なりき。(〇〇生)

#### (四) 對四校聯合勝負

(筆者不詳)

今年で三回目の聯合軍對本塾柔道試合があると云ふ掲示が貼り出されてから、道場に於ける稽古が彌が上にも活き活きして來た。二回とも勝つて居るので選手の責任も却つて重大である。五月十七日が待ち設けられたのであつた。折り悪しく當日は雨であつたが、慶應の選手は張子ではない、一人も残らず打揃つて、定刻の三時迄には農大の新築道場へと繰込んだ。敵軍も既に首を揃へて居る。やがて師範の訓辭があつて、紅は慶應、白は水産、高工、日宗大學、農大の聯合軍、晴れの舞臺は今である。

諒闇中の爲め、應援は成る可く静肅にとの事であつたが、二十人位は一人で引受けようと云ふ元氣で燃へて居る猛者連が、新築の道場も破れよと許りに金剛力を出し、祕術を盡して奮闘する撃拂の心地よさを目にしては、自分が柔道者を引つかけて飛び出したい位、黙つて觀て居られるものではない。いでや當日の奮闘振りを略記せん。

先づ紅軍の先頭として馬を進めたるは、力山を抜く伊藤文健君、之に對して白軍より第一番に名乗り出では、商工の荒武者佐藤君、共に自重が過ぎたか、力量が互角か、引分とは惜かつた。其内田卷君が敵を倒したのを我が軍の戰功の最初として、廣瀬君は得意の左腰投で奇麗に二本取り、尙もと機會を伺つて居たが、時間が来て三人目で引分となつた。續いて井畑君も、見事に敵の一人を返しで投げ飛ばしたが、二人目に惜しくも裏投で討死した。對手が皆揃つて大男であつ

た爲か、それから暫く引分がつづいた。その内に、吉村君が左の背負に、日蓮宗の荒法師を打取つて後は引分け、奇麗な手並みを見せて呉れたので、其後に控へる甲谷、岩井、安増、工藤、日東寺の面々は、平常の稽古熱心から推して、今日こそ功績を擧げるだらうと豫期して居たのに、敵軍の策略は引分を採るにあつたらしく、専ら守備に力を盡した爲め、短かい時間ではどうにも出来ず、引分たのは嘸かし無念であつたらうと心中御察し申す。新進氣鋭の大倉君が出て、相手が足拂で攻めて來るのを、其儘釣つて見事に背負つた時には大喝采であつた。續いて渡會君も亦道場有數の元氣者、腰投に一人を屠つたが、勝を急ぎ過ぎてその次にやられた。戦は愈々油が乗つて來た。塾に其人ありと知られたる幼年組の鈴木元ちゃんが、荒男二人を或は足業に、或は腰業に、散々手玉に取つた時には、敵軍の顔色は見られたものではなかつた。遂に絞められたが、其仇を塚田君が足拂で胸のすぐ程投げつけ、巴投で二人目に負けたのは残念。此奴生意氣など許り瀧川君が代つて立ち向つたが、敵は砦を堅めて戦はず、業ありを取つた丈けで引分けた。續く岩垂君も平生稽古熱心な人、業は益々強くなつて來た。今日も鮮かな大外で一人を打倒したが、敵の黒澤氏に押へられたは惜かつた。其仇を尾山君が瞬く内に投げ飛ばして討ち取り、續く對手をも絞めて参らせたが、三人目に疲れた所を押へらる。伊藤君此時疊を蹴つて立つと見る間に、足拂に之を仆して手柄を立て、續く敵と奮戦して引分けた。豊島君野田君も仲々よく奮闘したが皆引分。野田君の對手は雲突くばかりの大男で、こつちは得意の大外をかけても、其儘馬力で抱きあげられて了つたには驚いた。後藤君香山君共に好敵手を見出して火花を散らしたが、我軍利あらず、恨を殘して退けば、水永君は得意の内股に敵膽を寒からしめ、惜しい所で二人目に負けた。兩田中君と佐藤君、強敵と引分くれば、津守君飛び出して敵を組み敷き、新手の兵に斃る。茲に於てか西澤君出で日頃鍛へし手並を見よと、太刀風銳く切りまくれば、立向ふ者絶えてなく、一人二人三人と血煙立てゝ斃れしは、流石に幼・組の元氣者であつた。平本君も劣らじと、力戦大に努めたが、此の日武運拙なく、枕を並べて討死す。老功の石塚君悠々としてこの敵を刺し退け、次の仁木と引分く。紅より高橋君現はるれば、敵

の鳥海もさる者、高橋君を押込んで勝名乗を擧げたるも束の間、須川君また之を斃す。討つものは討たれ、勝つ者は負ける、諸行無常どころではない。見物人は大喜び、聲援の叫び、拍手の轟きは絶え間もない、中山君また一人を斃して引分く。北村君辻丸に負ければ、茂木君出でて此の仇逃がさじと、打出す體落に首級を擧げて、元氣も百倍、何の小倅奴一つぶしと、一氣に押寄する敵に得意の背負で一泡吹かせ、攻むれば退き、逃ぐれば追ひ、修練の早業目にも止まらぬ働きして、三人目に茂木君が引分くれば、岸田君代つて大業物打振りノ、幾度か敵を危地に陥れたれども、時間が來てチンチン、無念の顔して互に陣を引き退く。藤原惣ちやん、松永進君、何れ劣らぬ元氣者、凄い眼玉に一睨して、先づ得意の外に氣烟台を吐く。續いて月成元氣の大内刈、後學の爲に覺えておけと、矢繕ぎ早やに攻め立て山口君の仇を討てば、小山内君も亦吉澤君との奮闘により疲れて見へし敵將をば、五尺ばかりも跳ね上げしを始めとして、内股に押込に其名を揚げ、岩崎君、大隅君の引分けに續いて川崎君、東野君は、型でもやる様に一二の三で、一人づゝを投げ飛ばして引分く。森さんまたよく奮闘したるも、敵は砦を高うして出せず、恨を呑んで引分くれば、敵軍今や段外者悉く斃れて、茲に初段金子君を眞先にして我に備ふ。今日も亦本塾の勝だと、應援に來た幼年組の小さい連中は大喜び、手を振り足を躍らせて益々聲援に努むれば、敵方も負けては居らず、こゝを先途の應援に、喉も聲も嗄らす程である。

この時師範宣言して拍手以外聲援を絶對に禁止す。電燈は既に三時間も以前から道場を照して居る。時は早や八時頃ならん。其時味方の陣中より躍り出でたるは餘人に非ず菅井清君、袖を探るより早く左右の體落を連發して、隙間なく攻め立つれば、敵の黒帶君大苦戦の體なりしも、流石帶に對して面目なしとや、防戦よく努めて目出度く引分けた。次で出でしは伊澤君、小兵なれども得意の背負で物にするかと思ひしに、武運拙く跳腰にて戰場の露と消ゆ。續く橋口、甲斐の面面一步もひかず攻め立てしが、必死の敵には天も憐れと思ひけん、同じく豎子をして名をなさしめ、吉年君に至つて遂にこの敵と引分けたり。敵軍茲に於てか漸く生色あり、再び兵を出して我を招く。左れども記憶せよ、我が一級に尚ほ神崎、

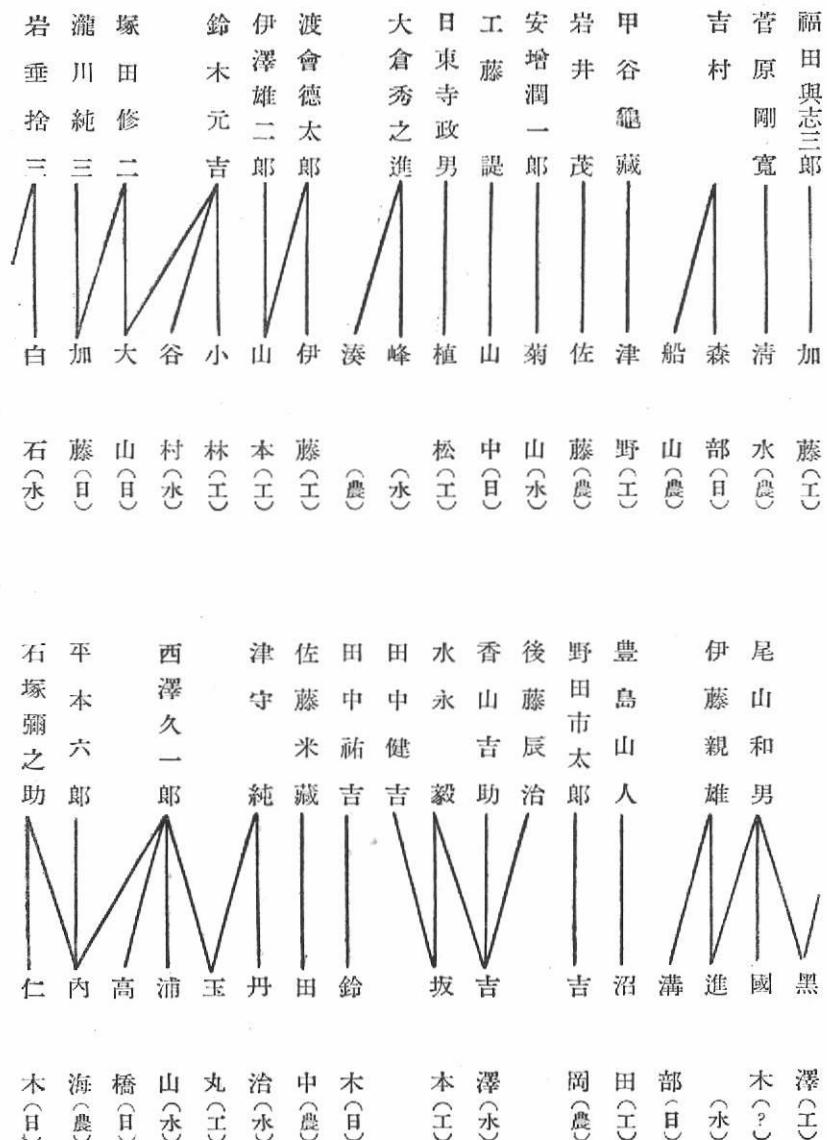
岡の二勇士あり。神崎君先づこれに應じて馬を進め、揉みに揉んで攻め寄すれば、敵もさるもの、能く守り能く攻め、勝負の程は見えざりしが、一分の猶豫があつてから、焦つて打出す敵の業をば慾々受けて裏に取り、續く敵と引組んで暫し雌雄を争ひしが、疲れたる身の如何にせん、遂に敵に名を成さしむ。岡君いかで弔合戦なからんや、強襲幾度か敵を苦しめ、最後に押込に勝名乗を受けて新手の敵に向ふ。君獨特の懸聲に、五六人は物の數かはの意氣を見せて、日頃養ひし馬力を振ひしも、自重や過ぎたりけん、引分となる。籠田君黒帯の先鋒を承つて進み出でしも、身體に故障ありしにや、平常の元氣なく、合業に敗れて退けば、負けた味を知らぬと云ふ富安君、落著き拂つて出でしと見る間に、巴投にて戦友の仇を斃し、續くを押込に取り、長驅武田を襲ひしが、敵の乗する所となりて跳らる。よし來れ、坂東舜一が早業目にも見よと、組むより早く釣り込む足拂に、大兵肥満の荒男をゾンデンドウと投出しつゝ、桑原をも一打ちと勇みに勇んで争ひしも、隙やありし、終に恨の袂を絞りぬ。坂東君の仇思ひ知れと、森君立つより早く大手に行きしが、敵の計畫圖に當りて返し業にて返り打ち。茲に於てか岩崎(清)君慾々機を俟ち、得意の跳腰に之を破つて對するは誰れ、二段に名ある眞島君、よき敵御參なれ、打取つて功名せんと、左右の跳腰に踏ん込み、攻め入り戦かつたが、敵の元氣も素張らしく、反つて跳腰に岩崎君を投げて、續く服部、山崎君をも釣込足に跳腰に戰場の露と消へしめぬ。幸田君此敵に對して應戦甚だ努め、足拂に九分九厘まで取つたが惜しい所で敗られた。中野森藏どん、遂に出でゝ之を倒し、更に二三人投げ出さんず勢で、宮崎を跳ねたれど、どうしたわけか奇麗に返さる、見物人一同囁然、茫然、それ程君に對する期待は大であつた。尾上君また同じくやらる。一體どうした譯?勝敗は兵家の常とは云ひながら、これはまた意外の番狂はせなり。今度は我軍からも二段の島君出づ、面白いと見て居る内に、寝たと思つたら審判官が一本と叫んだ、島君が逆手で取つたのださうな。實に息をもつがせずといふ早技だ。次ぎの對手は江橋君、兩方共に五角の勢、負けず劣らず、暴れまわつたが、島君に如何なる際やありけん、足拂でやられ惜くも負け。次の岡安君も副將なれば、對手も副將、あの身體で落著いて戰ふ岡安君

の修業も偉いもんだと感心させられる。兩人は鎧を削つて闘つたが引分となりて、遂に大將同志の戦が始まつた。一人の負けは全軍の敗北、勝てば一校の名譽、味方の大將の顔色如何にと見れば、相變らず黒い顔をして笑つて居る。二人は立ち上つたが、徳永總帥はあつ氣ない程早く左の大外で大將を投げてしまつた。

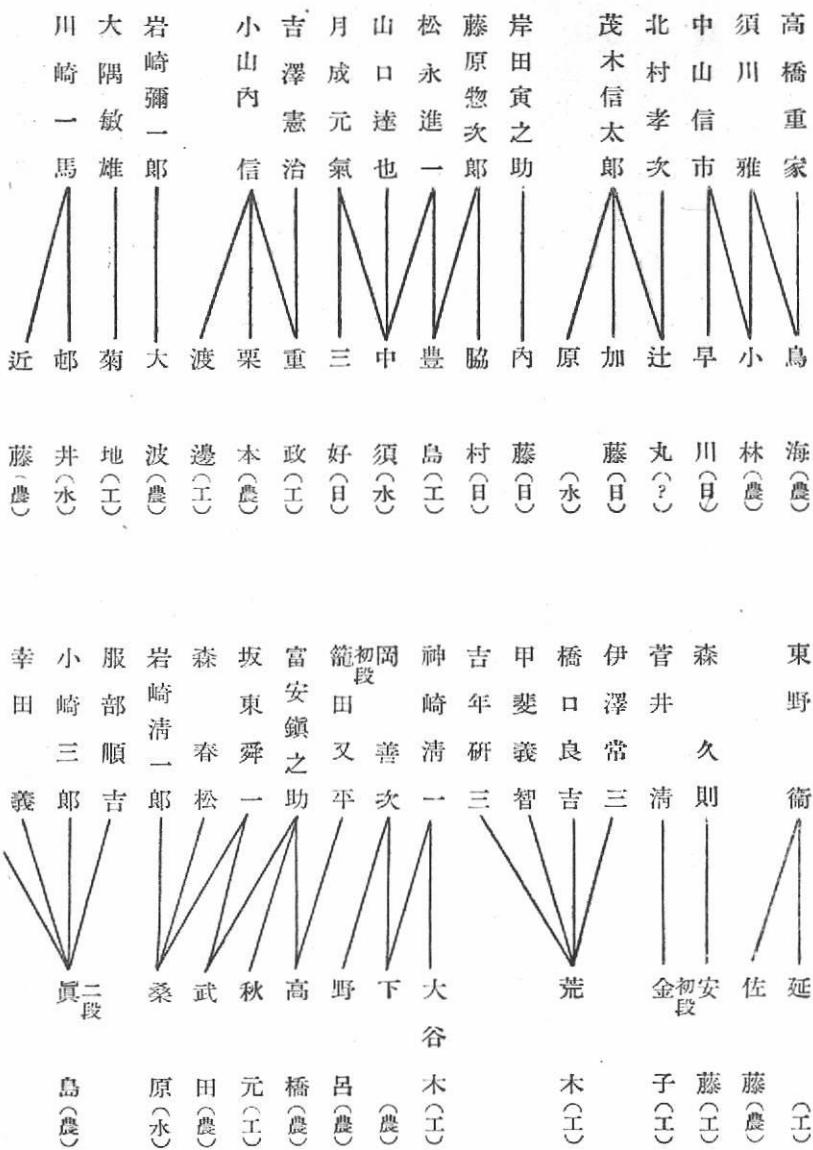
斯くして慶應軍は、三度戦つて三度月桂冠を得た。大將と大將との勝負となつた時には、笑ひ事でなく、實際心配だつた。従つて勝つた時の喜びは大したものであつた。既に時刻も九時半と云ふので、大分遅くなつては居たが、其場で茶話會が開かれ、ビールの祝杯が擧げられるとなると、敵味方さながら十年の知己の如く、胸襟を披いて且つ飲み且つ談じ、工農の諸君が先づ主人役とあつて隠し藝の火蓋を切れば、船頭さんも、和尚さんも負けては居らず、各々得意の喉を聞かせて一座をアツと言はしたが、塾方でも多藝な坂東君、橋口君、藤原君、松永君等あり、何れも本職はだしといふ程の賑ひであつた。

斯くて興は盡きなかつたが、時既に十時を過ぐる四十分、飯塚師範の萬歳を唱へて日出度散會した。  
尙當日の勝負表は次の通りである。





一八  
大正三年夏





## (五) 第二十四回大会

十月三十一日天長祝日の佳節をトして、第二十四回の大會が綱町道場で開かれた。前日來の陰雨尙晴れやらで、朝來極めて陰鬱なりしも、銳氣に満てる若人原、定刻前より參集して盛大なる例會であつた。

最初に幼年組及び成年組の紅白勝負があつた。幼年組に在りては、後の六段阿部英兒白軍の副將を承り、紅軍の大將茂木邦吉氏を打ち倒して戰勝を收めた。

次に例に依りて、普通部對商工部の第五回紅白勝負が行はれた。昨年の大會に於て敗戦の憂目を見たる普通部は、本年こそ其の驕を報いんと敦固けば、商工部は重ねて苦杯を嘗めさせんものと、兩軍陣容を固めて意氣互に下らず、双方の勇士能く攻め、能く守つたが、(白)商工部側にては、森永義忠、福田與志三郎、塚田修二の奮闘振り目覺ましかりしに反し、(紅)普通部側にては二人を抜きたるもの僅に副將舟木道敏ありしのみ。遂に紅將西澤久一郎と白の副將竹内廣吉の對戦となり、互に勝敗決せずして引分となり、隨つて勝利は茂木信太郎を大將とする白軍の手に占められた。

## (普通部)

## (商工部)

## 相川 涉

進藤 茂 渡會德太郎 鈴木元吉 岩井茂

(跳腰) 中村萬里 中村隆一(背負)  
 (絞) 松村繼彦 三木一郎  
 (跳腰返) 中村武雄

相澤 一

森永義忠(跳腰裏)  
 (合業)

土谷 實 福田與志三郎(大外刈)  
 (内股) 菅原剛寛

(内股)

舟木道敏

平本六郎

塚田修二(跳腰裏)

中西萬世

日東寺政男

安増潤一郎

田中健吉

横山嚴

西澤久一郎

竹内廣吉

茂木信太郎

土谷 實

舟木道敏

野田市太郎

塚田修二(跳腰裏)

右終つて午後二時より、對外來有級者の三本勝負に幾多の好試合を見せた。

## 三本勝負

## (有級者)の部

(高輪) 青野

(高輪) 山下 覚

(七) × (説) 久保田又藏

(高輪) 渡會德太郎(背負裏)

(四) ○○ 甲谷龜藏(押込)

(八) ○ 佐藤米藏(足拂)

(高輪) 北條祐允

(五) ○○ 岩垂梅四郎

(九) ○○(農) 加藤寛英

(高輪) 福田與志三郎(内股)

(六) ○○(農) 岩垂梅四郎

(九) ○○(日宗) 加藤寛英

(水) ○○(水) 吉澤久藏(腰投)

(六) ○○(農) 岩垂梅四郎

(九) ○○(日宗) 加藤寛英

(水) ○○(水) 國司經夫

(六) ○○(農) 岩垂梅四郎

(九) ○○(日宗) 加藤寛英

(附中) 鈴木造酒藏  
 ○○ 津守 純 (跳腰裏)  
 (東協) 二宮  
 (二二) × 二宮  
 (水) 谷崎精一  
 ○○ 鈴木元吉 (跳腰)  
 (日宗) 鈴木健二  
 ○○ 伊藤親雄 (同跳卷)  
 (錦中) 木東健二  
 ○○ 柯田寅之助 (大外返)  
 (附中) 境  
 ○○ 久 (大内刈)  
 (四) 柯  
 ○○ 久 (大内刈)  
 (五) × 境  
 ○○ 久 (大内刈)  
 (六) × 伊藤  
 ○○ 久 (大内刈)  
 (七) ○ 吉  
 ○○ 久 (大内刈)  
 (高工) 大  
 ○○ 伏  
 (八) ○ 伏  
 (高工) 大  
 ○○ 伏  
 (見) 道  
 ○○ 伏  
 (正) 正  
 ○○ 伏  
 (三) 三  
 ○○ 伏  
 (押込) (押込) (跳腰卷)

(錦中) 塚田修二  
 ○○ (獨協) 西嘉磨  
 (九) ○○ 滝川純  
 (美) ○○ 須川 (足拂)  
 (講) ○○ 山口  
 (九) ○○ (天外刈)  
 (附中) 辻  
 ○○ 正章 (釣込腰)  
 (三) ○○ 須川  
 (三) ○○ (天外刈)  
 (附中) 中内榮基  
 ○○ 後藤辰治 (跳腰返)  
 (三) ○○ 中内榮基  
 (三) ○○ (早實)  
 (五) ○○ 後藤辰治 (跳腰返)  
 (四) ○○ 後藤辰治 (?)  
 (六) ○○ 武宮俊三  
 (高) ○○ 舟木道敏  
 (七) ○○ 福井敏 (跳腰)  
 (六) ○○ 元次 (拂腰)  
 (七) ○○ 勉 (跳腰)  
 (中央) 下山田市太郎  
 ○○ (押込) (合技)  
 (二七) ○○ (押込) (跳腰)

(日宗) 星野  
 ○○ 廣瀬海人 (大外刈)  
 (早大) ○○ 大原三郎 (絞)  
 (九) ○○ 小山内信  
 (明大) ○○ 田子精一  
 (深田) ○○ 岩垂捨  
 (三) ○○ (小外刈)  
 (?) ○○ 國友直  
 (講) ○○ 永井信二郎 (小内刈)  
 (講) ○○ 藤尾  
 (三) ○○ (内股)  
 (東協) 三五 (内股)  
 (帝) ○○ 蒋原久則  
 (森) ○○ 藤文健 (絞)  
 (後) ○○ 安井和男  
 (後) ○○ 伊藤文健 (絞)

(部長挨拶)  
(有段者の初段)

(有段者の部)  
（初段）  
岡 善次

市川

此勝負は無論岡君のものと思ひしに、日頃の元氣何處へやら、今日は

少しく意氣消沈の様に思はれた。相手も中々自重したが、然し引分は物足らなかつた。

橋口良吉 ○水野（講） 日頃熱心な橋口君、小内刈と合せ技で、敵に勝を譲つたのは残念。

○菅井 清 ○伊藤 靜（講） 道場一の元氣者の清さん、エイと掛けてくる相手の大外刈、ドツコイ大外

は此方の十八番と、奇麗に返しての一本は痛快。何時もながら君の勝負は氣持が好かつた。

鳥居忠雄 ○永田源太郎（講） 鳥居君力戦の効なく、遂に大外の返しと大外刈に憧れた。永田君の奮闘

敵ながら天晴。

松尾我何人 ○辻 村（深田） 巴と大内刈で、辻村君一本共勝。

關川源一 ○金子進實（高工） 火の出る様な白兵戦、關川君幾度か奮戦肉迫したが、敵もさる者防禦に力め君の猛烈なる攻撃も遂に其効なく、時間となつて引分は惜しかつた。

坂東舜一 ○前田武郷（講） 綱町道場で名だたる元氣者、今日は相手が強かつたのを、幾度か危地に陥れたが、時間に制限の有るのを如何せん、引分は遺憾だつた。

森 春松 ○桑原義輔（水） 相手は水産に其人ありと知られた桑原君、森君の力戦奮闘も甲斐なく、遂に跳腰二本に敵をして名を成さしめたるは、口惜しき極みであつた。

○服部倉三郎 ○三浦泰一郎（深） 服部君の強さ加減は、今日も亦見られた。左の跳巻に續けて二本、全く敵をして権取る隙も與へなかつたのは痛快であつた。

○岩崎清一郎 ○津山玄造（帝大） 敵の切り込む大外刈を奇麗に返して、その次は得意の右跳腰、これで二本。斯う云ふ勝負は見て居ても氣持が好い。

○尾上繁一 谷 崎（帝大） 気持の好い勝負がこれで三つ續いた。相手が手も足も出さない内に、得

意の跳巻、然も續けて一本。再び敵の起つ能はざる程叩き付けて、本日の特別賞品は當然であつた。

田 中（講） ○岡 部（早實）

跳腰で岡部君の勝。

○山崎三郎 大部二郎（中央） 山崎君、エイと飛込む敵の跳腰にアツと思ひしに、ヒラリ體を躰すや、裏を取つて投げつけた手練の早技、鮮かなもので有つた。

○幸田 義 石 橋（早大） 間一髪を入れざる君の早技、然も得意の釣込腰、除ける隙もあらばこそ。然し一本では物たりなかつた。

片山國忠 × 龍口 彰（講） 堂々たる體軀を提げて陣頭に起つた片山君、相手の力戦奮闘も何んのその、動かざる事大山の如しだ。然も敢て自ら名を成さず。莞爾として引分せるも亦一興か。

## （一 段）

中山節郎 × 野 呂（農大） 雙方自重し過ぎて引分。

富安鎮之助 × 水村 巴（明大） 雙方力戦苦闘、上となり下となり戦ふ事數合、左れども力が等しかつたのか、引分は惜しかつた。

○中野森藏 齋藤壯一（一高） 我が中野君の向ふ處敵なしといふ有様、忽ち足拂の返しに、得意の大外刈に、疊の座と投げつけて、名譽の金牌を得て引きあげる姿は、勇ましかつた。

○高橋 篤 湧 井（講） 勇戦數度、最後に返しと跳腰の合業に、高橋君の一本は力の入つた勝負だつた。

島 泰次郎 × 芦澤夏雄（早大） 泰さんは塾一の技士、芦澤君は早稻田の大將で肥大漢、將に三田と早稻田の一騎打である。雙方秘術を盡して戦ふ事數合、各々技有りを取る、爲に觀者をして手に汗を握らしめた。最後に島君

得意の背負にウンと投げつけたが、然し其れは審判の嚴かなる引分の宣告の後で有つた。

徳永秀夫——○牛島一夫（明大）雙方大兵同士の取組、如何に相手が明大にその人ありと知られた牛島君とは云へ、此方も幾多の戦場を踏みたる徳永君なり、幾度か跳腰に内股に又大外に肉迫すれど、敵は善戦能く力め、遂に院の逆に一本せしめられたるは、惜しき極みであつた。

## （六）對高等師範試合

（シモケン生）

回想すれば七年の昔、我部は湯本氏を大將に、吉武氏を副將とし、帝大と尾山血河の奮戦をなして、斯界を驚倒せしめたり。爾來絶えて壯烈なる對校試合なく、四校聯合勝負ありと雖も、我は全力を擧て之に對するを得ず、好敵手なきを恨むこと久し。今偶々高等師範よりの挑戦に接しぬ。私は今春山本、塚本、澤山、金子の三段、及び幾多有爲の有段有級者を送り出して、陣形轉た寂寞の感なきにあらざれども、健氣なる敵の振舞ひ、千載一遇の好機逸すべからず。

乃ち我部は老巧なる飯塚を大將に、精悍なる菅井を副將に、堅質なる鶴淵を三將とし、以下二段六名、初段十一名、一段級十名、合計三十名の精銳を選抜し、猛烈なる稽古をなす事五十餘日、秋氣涼しき十一月十五日、大塚なる高等師範學校講堂に於て、嘉納、三船兩氏審判の下に、拍手聲援一切を禁じ、頗る莊嚴に舉行せられたり。

此の日、我部選手一同は、十一時三十分網町道場に集り、外に先輩湯本、中村、中野、盛田、關等諸氏も參集、中村氏立て勝負並に審判に關して注意する所あり、次に全軍の總司令飯塚將軍一同の奮闘を誓ひ、中村氏發聲の下に、柔道部萬歳を三唱して大塚道場に向ふ。戰はざるに意氣既に敵を呑む。

薩摩原より電車に乗り、十二時四十分高等師範學校着、直に選手控室に入る。定刻一時も近づきしかば、一同戰鬪準備をなす。余は選手に先ちて會場に到れば、道場既に立錐の餘地なく、以て當日の勝負が、如何に斯界の注意を惹きしかるに足るべし。

やがて選手入場、敵は四段岡部を大將に、我は飯塚三段を大將に以下同數の二十九人、幹事乙竹氏立て開會を宣し、兩軍一禮すれば、五段三船氏審判者として立つ。

呼出係の聲に應じて、紅（塾）植木、白（高師）大久保出づれば、滿場の視線一時に茲に集る。植木屢々敵を危地に陥れしが、大久保が得意の内股にて、凱歌先づ白軍に擧る。代て現れしは大原、堂々たる體軀、我こそ戰友の仇を報ぜんと逸る心を押へつゝ、勇奮して戰ひしが、勝敗遂に決せず。次に出でしは（紅）舟木と（白）長畠、舟木は曾て京都同志社に於て勇名を馳せし者、直に長畠を裏にとりて、木村と相對す。木村必死と奮闘せしが、舟木能く之をあしらひて引分。（紅）の松永（白）の伊倉、松永は奮然たる氣概ある者、我こそは天晴功名せん者と、得意の體落屢敵の止めを刺さんとせしが、あせつて打出す大外刈、却て破綻の因となり、返されて敵に名を成さしめしは殘念なりき。小山内小癪なる敵の振舞かなど、跳腰見事に極まつて木島に向ふ。石火を散らして爭ひしが、互の力や等しかりけん、勝敗決せずして終る。次に出でしは（紅）神崎、（白）越川、神崎いかに精悍なりと雖も、越川が鬼をも拉がん獰猛なる體軀を見ては、勝敗いかにと危まれしが、機を見て掛たる越川の得意の跳腰、神崎得たりと抱き上げて、之を見事に裏にとりしは、天晴の手際。次の水田よく戦ひしが、老巧なる神崎を凌ぐに至らずして引分けたり。代つて出でしは（紅）田中（白）藤村、田中小兵なりと雖も、其技既に定評あり、殊に勝負上手の君なれば二三人は確實と思ひしに、勝敗遂に決せざりしは、雙方苦手と見受けられたり。（紅）東野（白）東口、東野いかに精悍なりと雖も、敵も亦白軍に其の人ありと知られたる剛の者、祕術を盡して健闘せしが、白の大外功を奏す。川崎小癪なりと打向へど、大漢東口を如何ともする事能はず、武運拙なく跳腰に

て戦友の後を追ひ、月成味方の一大事、いで奮戦して我が陣容を整へざるべからずと、一氣に敵を屠らんとせしが、東口獅子奮迅の勢もて打出す體落、又々効を奏して意氣昂然たり。何すれば紅軍斯くも甚しく振はざるか、既に一人までも喰ひ込まれぬ。

茲に於てか紅軍は、愈有段者關川の出陣を見るに至れり。味方の不振を眺めたる關川、いかで黙するを得ん。勝誇れる東口をば内股にて見事に取つて投ぐ。東口敗れたりと雖も、汝が此の日の戰鬪振こそ實に目醒ましかりき。次の長畠無段者の殿將を承る者、關川之もと打出す内股、惜しくも返さる。岡眼光銳く立向ひ物々しき敵の振舞かなと、射出す左右の跳腰物すごく、遂に體落にて戦友の仇を報ひしは痛快なりき。白軍の初段倉田出で、岡の疲勞に乗じて、一氣に敵を制せんと攻立つれど、岡能く之を防ぎ、勝敗決せずして引分くれば、(紅)の菅井(白)の渡部現はる。菅井は之れ勇敢健闘の士、得意の體落、屢々敵を危地に陥れしが、敵もさる者引分は是非もなし。(紅)幸田(白)山内、先んずれば人を制す、堂々たる山内の體軀も、微妙なる幸田が巴に見事捨てられ、代る橋本は寢業に名ある者、直に幸田を押へて岡田に對す。精悍隼の如き岡田は、戦友の仇思ひ知れと、激しく腕の逆に行きしは、目にも止まらぬ早業にて、島崎代つて現れしが、岡田を凌ぐに至らずして引分。(紅)の尾上(白)の清水は、奮戦すること數合、尾上得意の跳腰物屢々敵の心膽を寒からしめしが、敵も中々の剛の者、巴投にて恨を呑みしは遺憾なり。此の有様を見て悲憤やる方なく、疊を蹴て打向ひしは、坂東舜一なり。その支釣込足見事に極つて齋藤に向ふ。互に攻めつ、攻められつ、いづれを勝としま弓、坂東優勢と見る間に、惜しくも大外にて討死を遂ぐ。紅軍の花形岩崎、此の武器を知らずやと、打出す左右の跳腰物凄く、流石要害堅固の齋藤も、遂に跳飛されて戰場の露と消ゆ。及川小癪なりと現れしが、勇敢なる岩崎の奮鬪振りに進む能はず、終始防戦に努めければ岩崎も施すに術なく、勝敗遂に決せずして分る。(紅)山崎(白)阿部、互に祕術を盡して奮鬪せしが、是亦引分け。勝負上手の山崎としては殘念なりき。

勝負進んで益々佳境に入らんとす。兩軍こゝに陣形を正せば、城南に其人ありと知られたる(紅)の服部、之に對するに(白)の納富を以てす。服部は勇戦奮闘の士、得意の左跳腰は、其銳鋒實に當るべからざるものあり。納富先づ跳られて、二段佐間田代る。白軍の陣容是より漸く亂れんとす。佐間田も服部の跳腰には敵すべくもあらず、忽ち戰友の後を追ひ、守分小癪なりといはんばかりに激しく攻むれども、服部をば如何ともする事能はず、又々服部の得意見事に極つて悲壯の最後を遂ぐ。服部恰も無人の境を行くが如く、島田に向ひしが、數回の戰鬪に疲勞の色あり、島田此處ぞと服部を押込む。服部敗れたりと雖も、君が此の日の働き、金鶴勳章にも値すべし。片山偉大なる體軀を悠々と運び、得意の體落何なく極つて島田を打取る。

時に白軍より奮然として現れしは、猛漢櫻庭なり。狂へる片山を體落に攻むれば、流石は片山、體をヒラリと交はして之を防ぎしが、審判者一本の宣告をなす。吾人は事の餘りに意外なるに驚きしが、審判は神聖にして侵すべくもあらず。紅軍是より漸く亂れんとするか、さるにしても片山の無念や如何ばかり。悲憤やるせなき富安、なんのと櫻庭に向ひしが戰利あらずして足拂に打死を遂ぐれば、岡安代る。岡安は體軀小なりと雖も、幾多の戰場を馳驅せし、千軍萬馬の老將軍、巧妙なる足業屢敵を危地に陥れしが、櫻庭勝れたる脅力を頼みて押込む。味方の不振を眺めし島、慨然として得意の頂上にある櫻庭を押込む。櫻庭敗れたりと雖も、味方の頽勢を一舉にして挽回したる功や偉大なり。村井出づれば、島奮戦能く努め、始終敵を壓迫せしが、勝敗見えずして引分。(紅)の徳永(白)の宇土、いづれも堂々たる體軀、實に好個の對戦なり。徳永得意の左跳腰奇麗に極りしが、氣合なかりし爲か審判者業ありとなす。今少しく氣合ありたらんにはと、悔めども及ばず、遂に引分は惜むべき勝負なりき。改まつて(紅)牛久(白)會田、互に激しく渡り合ひ、牛久の跳腰屢功を奏せんとせしが、敵の止を刺すに至らず武運拙なく體落に倒る。中野怒髮天を衝き小癪なる敵の振舞かなと、何なく會田を足拂に倒し、續く富田をもと激しく攻むれど、敵も中々剛の者、中野力未だ盡きざるに大外刈に倒れたるは、寔に惜み

ても尚餘りありといふべし。鶴淵愈馬を陣頭に進めぬ。紅軍の興廢、實に君の一戦にあり。聞く、君數日前腰部を痛めたる。果せるかな、君の鉢先常になく鈍り、打出す跳腰日頃の面影なく、却て富田が決死の奮闘功を奏して、勇將鶴淵涙を呑んで退陣す。

是より三船審判嘉納師範と代る。粧ひ美々しき副將菅井も、味方の一大事と怒氣満面に溢れ、逸る心を押し鎮め、猛り狂へる富田をば、體落に業を取りて、素早く腕の逆に之を屠り、副將杉山に向ふ。奮戰數刻の後、遂に杉山をして背負に名を成さしめしは殘念の極みなり。愈々大將飯塚出づ。飯塚は之れ全軍の總帥、體躯あまりに大ならねど、堂々たる其取口、凌々たる其氣骨、老練なる其技術、勇名を天下に馳するや久し。杉山如何に精銳なりと雖も、元より飯塚の敵にあらず、直に絞められて、岡部之に代る。岡部は今春講道館に於て、二段四人三段三人を撫で斬りにして、雷名を天下に轟し、特に抜擢せられて四段に列せられし者、此の勝負如何あらんかと、觀者片唾を呑む。飯塚寢業を得意とすれば、岡部は立業を利とし、合しては離れ、離れては合し、掛聲勇ましく奮闘すれど、勝敗容易に決せず、時は進んで引分の時刻を告ぐれど、審判者平然たり、規定の時刻を過る事、五分、十分、十五分、二十分、既に副將を倒せる飯塚は、疲勞益加はれど大任を荷へる重き身なれば、瀧なす汗を拭ひつゝ奮闘せしが、戦遂に利あらずして、合業にて凱歌白軍に舉りしは是非もなし、飯塚將軍の無念思ひやるべし。さるにても五十餘分の奮闘、既に刀折れ矢盡き、身亦幾多の重傷を負ひしにも拘らず、孤城を守れる其氣概や、敗れたりと雖も偉なりといふべし。

終りに臨んで、先輩中村、湯本、吉武、中野の諸氏が、常に我軍の參謀として盡されたるは、吾人の頗る意を強ぶせし處にして、深く其の厚意を多とするものなり。

勝負表左の如し。

(引分時間有級者七分、有段者八分、副將十五分、大將二十分)

紅(本塾)

白(高師)

植木義雄  
大原幸太郎  
舟木道敏  
松永進  
小山内信一  
神崎清一  
藤水越  
木伊大  
長村大久保

岡幸一郎  
岡田義清  
菅井善次  
岡川源一  
月成元  
川崎一  
東野氣  
中馬衛  
祐吉  
田藤  
中水  
内伊  
神崎大  
永木越  
崎木伊  
崎木長  
崎木長  
崎木大久保

尾上繁二  
坂東舜一  
岩崎清一郎  
山崎三郎  
服部倉三郎  
片山國忠  
岡安寛司  
富安鎮之助  
島牛久  
島泰次郎  
島森藏  
島中野  
鶴淵  
菅井  
飯塚  
岡茂  
杉義邦  
富毅  
富会  
守村  
佐櫻  
守島  
守佐  
守納  
間納

水藤川富田分田庭  
水藤川富田分田庭  
水藤川富田分田庭  
水藤川富田分田庭

## (七) 雜記

### 有段者會

本塾卒業後十個年間英領印度に在りて各地を巡遊し、或は學校又は體育會に於て、或は英國の聯隊に於て、或は印度王國の宮殿に於て柔道を教授し居りたる先輩三段佐野甚之助氏、此度歸朝せられたるに依り、四月十七日午後六時同氏歡迎の爲め、有段者會を今福樓上に開いた。宴酣にして先輩吉武氏の歡迎の辭あり、師範も亦所感を述べられ、最後に佐野氏の土產話ありて、一同胸襟を啓き、舊を談じ新を語りて一夕の歡を盡した。

又五月一日に山上の俱樂部に於て、部員の有段者會を開いた。同日は恰も壽を全うせずして夭折したる、池野梅三氏の一周年忌に相當せるを以て、一同故人の追憶談に暫し哀愁を唆つたが、軽てビールが運ばれて興湧くと共に、坂東氏を中心として、或は獨立自尊論に、或は國家論に議論の花を咲かせ、甲論乙駁漸く師範の折衷説に引分の宣告が下されて閉會となつた。

六月八日午後六時より山上大和軒に於て、此度渡米せられんとする闘、高梨兩氏及び任地臺灣に向はるゝ柳澤、齋藤兩氏の送別を兼ねて有段者會が催された。師範を始め先輩諸氏並に有段者十數名相會し、島幹事の送別の辭、柳澤氏の答辭等ありて、十時過ぎまで歡談した。

更に九月二十三日夕刻よりヴヰカース・ホールに於て有段者會あり、參列する者約二十名。飯塚幹事の開會の辭ありて後、今回高等師範より對校勝負の挑戦ありたる件に就て討議し、結局之に應することに決し、翌日より出戰選手の出席を勵行し、猛烈なる稽古を爲すことを約して散會した。

## 日光遠足會

今年の旅行は、箱根にすべきか、鹽原にすべきか、噂はまち／＼であつたが、たうとう日光行のこととに定まつた。卒業生の送別遠足である。

いよいよ十月十六日午後一時上野驛を出發した。照らず降らずの好天氣である。

此度は、普通部、商工部の人々は殆ど加はらず、只一人位次坊宮田君が、差當り其代表者と云ふ格、それでも尙一行は三十餘名の多きに及んだ。汽車が出ると、間も無く例の口達者な車中商人が、赤い本やら玩具やらを持ち出して、おきまり文句をならぶれば、一行の野次連頻りに是を野次り立て、たうとうこれを追ひ歸してとつと笑ひ出す。先づこれを皮切りに騒ぎ出して、歌ふ者もあれば、詩を吟するものもあり、拳を闘はす者もありて、車内は激動たる大騒ぎ。汽車はぐんぐん進行して、早くも、關東平原を通り抜け、何時か山の中を走つて居る。六時頃日光驛に着す。

先着の岡安、岩崎兩二段の出迎を受け、神山館に入る。人員を調べると一人足りないとのこと、一同大いに案じて居たら、某君が宇都宮で乗り換へを間違へた事と知れて、漸く安心した。

一風呂あびて膳に向へば、豪の者揃の事とて食ふは／＼、女中が目をまはさんばかりの始末。夕飯に元氣を回復して、暫く休憩の後、茶話會を開く。こんな頑猛さんに、こんなやさしい藝があるかと驚くばかり、仲々の藝人揃である。尾山君の謡曲や、森君の長唄などは、先づ御手のものとしても、御大茂さんの端唄には誰しも意外だつたらう。うまいも、まづいも聞き分けのつかぬ吾々は、たゞ人は見掛けによらぬものと評して置かう。中野オドン君、破れ鐘の様な聲で「七ツ八ツから……」と怒鳴り立つれば、橋頑君は得意の佐渡節に喉を聞かせ、岡茶目君も亦大に得意の藝を出して笑はせるなど、暫くは餘興百出の狀があつたが、また明日もある事と十時半閉會寝に就く。

第二日 神山旅館を出たのはもう彼れ是れ八時であつた。細長い日光の町を行き詰めて、大谷川に沿ふ坦道を、朝日を背に浴びながら我々はのびのびした氣分に包まれて行く。時々電車が一行の後を劫かして行き過ぎるのみ。秋の午前は至極平和である。

元氣のいゝ歌唱ふ一隊は、馬返しの力餅を頬張りながら、山道へ差しかかる。「七ツ八ツからいろはーをたらひ……」聲は澄み渡る大氣を衝いて、紅葉する山々に響く。道は折れては曲る葛折、「オーア」と呼べば『オーア』と頭の上に答へる。行進ふものは、紅葉かざした人々である。森さんや惣ちゃんが、朗々たる聲を揚げて、そろりそろりと肩で進む。一行は之につれて唱ひ、且つ歩くのである。正に之れ浮世を離れし風流人の群、道行く人は振り返つては首をかしげる。登りつめると道は稍々平らである。

岩間漏る水に洗はれる道を下る。轟々たる響は日光山に冠たるてふ華嚴の瀑布である。一行はシャツ一枚になつて瀑壺の際に、其濛々たる水煙と、麗しき虹とを見た。五郎兵衛茶屋に引揚げた時は、一同濡れ鼠である。宿から持參の辨當は瀑の上の茶屋で喫した。

中禪寺をモーター・ボートで渡る。三十餘名が一隻の小舟に乗込んだのだから驚く。舟は八分方水の中である。ボツボツと云ふ爆音と共に、一行の花形位次坊と同姓の運轉手はハンドル操る。重い液體を流し込んだ様な湖を、西へ西へと走る。男體山は堂々たる偉軀を、僕等の上へヌツと出して居る。二十分も來たかと思ふと、俄然ボートは爆音を停止して止まつた。『町から揮發が届かないんで、石油でやつてるもんですか、力が弱いんでね』と運轉手は云ふ。宮田君の修繕で動き出したのはいゝが、それからあとは十間行つては止まり、五間行つては止まり、舟の停り方は益々頻々となつて來た。風が寒いのに舟が動かなければ、不平は自然に出る。宮田君は無暗にあせるが、動かないものは動かない。遂に、半途にして明朝九時迄に出迎へに來ると云ふ約束の下に、舟を捨てゝ湖畔の道を歩む事にした。頭上を蔽ふ紅葉、足下を彩る紅

葉、光に満ちた紺碧の秋旻と、青藍を流した様な湖面とは、木の間に漏れる。其中を行く一行は、正に畫中の人である。

湖畔の絢爛極りなき眺めは、戰場ヶ原につきる。高原の秋は正に酣である。男體、白根、如實の山々は、午後の日を浴びて褪紅色に光る。榎松、白樺の上を蕭々と風が渡る。自然の作り得し最も秋らしき秋である。斧鉄入らざる荒野を行くの概がある。

湯瀧の雄大なるを稱し、湯の湖畔の幽邃な景色を眺めながら、葦の間に湯氣立ち昇る湯本の宿へ着いた。神山旅館に比して、なか／＼優待である。一浴して夕餉をすまし、雜談に耽る。例によつて駄洒落が盛に出る。神崎、岡安兩君は此の方のオーバーリティー。

湯は内湯もあるが、外の湯が趣き深い。恰度、山月煌々たる晩である。一休みの後、手拭肩に湯へ出掛ける。湯槽は五六箇所にある。濛々たる湯氣の中に、行燈一つ淡く光る。一同は心逝くばかり歌つた。其晩は、皆三回づゝ湯へ入つた。岡君ばかりは十回。夜氣は中々冷い、十時頃就寝。

第三日 六時起床。湯に入り、湯本を出たのが七時半頃であつた。九時の約束があるから、一同急ぎ氣味に歩く。湖へ出ると、宮田君が、ぽかんとして待つて居た。モーターハンマーは今日は順調に走つた。午頃になると、朝から曇つて居た空が、たうとう持ちきれなくなつたと見えて、ボツリボツリと雨を落して來た。瀑の近所で晝餐をしたゝめた。モーターハンマーへ乗りそくなつたので、それと競争して走つて來た連中もある。下りは雨に降られたから、逃げる様にして馬返しに出た。雨は全く本降りである。電車で町へ出て、廟を見た人もある。停車場で時の來るのを待つて、日光を去つたのは五時。車中は相變らず大騒ぎ、上野へ着いたのが十時頃であつた。之れで無事に旅行も了へた。卒業生諸兄もさぞかし満足せられたことと思ふ。（同行生）

## 進級一括

○一月十二日講道館鏡開に於て昇段せし者左の如し

二段へ 三浦種良、稻葉茂、福澤駒吉、田中謙一郎、小原福平、和田義隆、富安鎮之助、山本忠清、坂東舞一、森春松、  
後藤豊吉

○一月一日月次勝負の結果

一級へ 松永進一、藤原惣次郎、小山内信

○一月十五日卒業生送別紅白勝負の結果

二級へ 野田市太郎、尾山和男、後藤辰治、平本六郎、田中健吉

一級へ 山口達也、川口辰藏

○二月講道館昇段式に於て

初段へ 關川源一

○五月八日講道館昇段式に於て先輩西川一也氏は初段へ、高橋篤氏は二段へ、松尾恒四郎氏は三段へ各昇進した。

○五月三十一日講道館春季紅白勝負に於て

初段へ 岡善次

○六月十四日の月次勝負の結果

二級へ 塚田修一

一級へ 中山信市

○九月二十七日月次勝負の結果

二級へ 伊藤文健、津守純、甲谷龜藏

一級へ 茂木信太郎、尾上和男、田野元次、香山吉助、舟木道敏、岩垂捨三、北村孝次、西澤又一郎

○十月の大會及び十一月二十一日の月次勝負の結果

二級へ 伊藤親雄、中村武雄、古谷次一

一級へ 津守純、野田市太郎、塚田修二、伏見正三、後藤辰治、佐藤米藏、平本六郎、山崎善賢、石塚彌之助

○十一月十九日講道館昇段式に於て

初段へ 田中祐吉、東野衛、川崎勝馬

二段へ 山崎三郎、片山國忠、岩崎清一郎、服部倉三郎

## 一九 大正四年史

### (一) 寒 稽 古

例年の如く一月十三日寒稽古を始む。寒稽古中に、先輩盛田保三氏の友人にして、先般青島攻撃に參加したる江渡少佐の戰爭談あり。この日は寒稽古を一と朝休みとなした。會する者二百名、中々の盛會であつた。夕刻新舊幹事及び先輩等今福に會し晩餐を共にした。